社会的逆境からの回復に関する基礎調査

(2) 性差の検討

○ 齋善英¹・高橋幸子¹・堀毛一也²・安藤清志²・大島尚²

(¹ 東洋大学 21 世紀ヒューマンインタラクション・リサーチセンター・² 東洋大学社会学部)

キーワード：社会的逆境・回復資源・Web 調査

A Basic Research for the mental recovery resources from social adversities

Seonyoung YOO¹, Sachiko TAKAHASHI¹, Kazuya HORIKE², Kiyoshi ANDO², Takashi OHSHIMA²

(¹HIRC21, Toyo Univ., ²Dept. of Sociology, Toyo Univ.)

Key Words: Social adversity, Recovery resources, Web investigation

目 的

「社会的逆境 (social adversity)」とは、親密な他者との死別・離別等による喪失体験、犯罪・差別・いじめなど社会的な被害体験、震災・台風など自然災害による被災体験、経済的困窮等による社会的困難体験などを幅広く包括する概念である (堀毛・安藤・大島, 2014)。

さまざまな逆境を包括的に扱うためには、各社会的逆境に関する基礎的情報を収集し、類似や相違などから分類の適切性を検討する必要がある。しかし従来の研究は逆境を個別に扱ってきたため、逆境間の比較に基づく特徴づけや包括的整理は不十分である。そこで本研究は、各逆境における経験の有無や精神的回復・健康を男女で比較し、社会的逆境の性差に関する基礎的情報を収集することを目的とする。

方 法

1) 調査票: a) これまでの研究を参考に、表1に示す 16 種類の「社会的逆境」について、複数回答により経験の有無を尋ねた。「その他」に有りと回答した者は具体的な内容の記述を求めたが、本分析からは除外した。b) もっともつらかった経験について、(1) つらさの程度 (1. ほとんど感じなかった～4. 非常につらかった)、(2) 立ち直りの程度 (1. 全く立ち直っていない～4. ほぼ完全に立ち直った)、(3) プラスになった程度 (1. まったくプラスにならなかった～4. 非常にプラスになった) に関する回答を求めた。さらに精神的健康の指標として、4) 精神的健康度 (GHQ12, 中川・大坊, 2013)、5) 主観的ウェル・ビーイング (SWLS, Diener, et al., 1984/角野, 1995)、6) 心理的ウェル・ビーイング (PWB, Ryff, 1989/西田, 2002) への回答を求めた。PWB に関しては、堀毛 (2011) の因子分析結果をもとに 12 項目を選択し実施した。

2) 調査対象者: 平成 26 年 3 月に、Web 調査 (マクロミル社に委託) により、20 代から 60 代の男女計 12360 名から回答を得た。

結 果

1) 社会的逆境経験の有無と性差: 表1に、各社会的逆境の経験の肯定率を性別に示した (複数回答)。その結果、「(自分自身の) 病気・ケガ」「失業やリストラ」「仕事・勉強上の失敗・不登校」「自然災害による物質的被害・ケガ」「火事による物質的被害・ケガ」「交通事故 (道路、鉄道、航空、船舶) による物質的被害・ケガ」「原発事故による被害」「借金・経済的困窮」において、男性の肯定率が有意に高かった。一方、「親しい人との死別」「家族や親しい人の病気・ケガ」「家族やパートナーによる暴力」「犯罪の被害 (東南、詐欺、暴力、スーカーなど)」「いじめや嫌がらせ (セクハラ、パワハラ、差別など)」「家族の不和・対立」「介護・看病」では、女性の肯定率が有意に高かった。

2) 逆境経験のつらさ・立ち直り・プラスになった程度: つらさの程度では、「失業やリストラ」および「火事による物質的被害・ケガ」以外の 14 種類において女性の方が男性よりも有意に得点が高かった。立ち直りの程度では、「親しい人との死別」「(自分自身の) 病気・ケガ」「家族や親しい人の病気・ケガ」「家族の不和・対立」「原発事故による被害」において、男性の方が女性よりも有意に得点

表1. 性別の社会的逆境の肯定率と検定結果

社会的逆境の種類	肯定率 (%)		検定結果
	男性	女性	
1 親しい人との死別	67.2	73.2	53.51 ***
2 親しい人との離別 (失恋、別居、離婚など)	48.2	48.4	0.04 <i>n.s.</i>
3 (自分自身の) 病気・ケガ	49.1	45.6	15.28 ***
4 家族や親しい人の病気・ケガ	51.6	61.2	116.47 ***
5 家族やパートナーによる暴力	6.8	13.9	133.31 ***
6 犯罪の被害 (盗難、詐欺、暴力、スーカーなど)	15.0	16.4	4.31 *
7 いじめや嫌がらせ (セクハラ、パワハラ、差別など)	31.5	38.9	73.73 ***
8 家族の不和・対立	28.2	38.8	155.92 ***
9 失業やリストラ	23.6	18.1	55.68 ***
10 仕事・勉強上の失敗・不登校	32.5	25.8	66.15 ***
11 介護・看病	13.6	20.3	98.55 ***
12 自然災害による物質的被害・ケガ	9.5	8.3	5.04 *
13 火事による物質的被害・ケガ	3.5	2.0	26.41 ***
14 交通事故 (道路、鉄道、航空、船舶) による物質的被害・ケガ	23.2	14.2	165.01 ***
15 原発事故による被害	3.8	2.6	13.25 ***
16 借金・経済的困窮	25.4	20.8	35.70 ***

が高かった。一方、「親しい人との離別」「いじめや嫌がらせ」「失業やリストラ」「仕事・勉強上の失敗・不登校」において女性の方が男性よりも有意に得点が高かった。プラスになった程度では、「家族やパートナーによる暴力」「犯罪の被害」「家族の不和・対立」「自然災害による物質的被害・ケガ」「火事による物質的被害・ケガ」「原発事故による被害」「借金・経済的困窮」において男性の方が女性よりも有意に得点が高く、一方、「親しい人との死別」「(自分自身の) 病気・ケガ」において女性の方が男性よりも有意に得点が高かった。

3) 逆境経験後の精神的健康度およびウェル・ビーイング: GHQ (精神的健康度) については、女性の方が男性よりも有意に得点が高く不健康であった。一方、主観的ウェル・ビーイングおよび心理的ウェル・ビーイング 6 因子 (人格の成長、環境制御力、自己受容、人勢の目的、自律性、積極的人間関係) については、いずれも男性の方が女性よりも有意に得点が高かった。

考 察

社会的逆境経験は、種類に関わらず主に女性が男性よりもつらさを感じやすい可能性が示唆された。一方、プラスになった程度は、男性が女性よりも感じやすい可能性が示唆された。このほか、「家族との不和・対立」「原発事故による被害」から立ち直りプラスになったと感じていた。一方、女性は男性よりも「親しい人の離別」から立ち直りプラスになったと感じていた。ただし、立ち直りとプラスになった経験の性差は約半数の逆境においてのみ見られたことから、多様因との関連から逆境の特徴をさらに検討する必要がある。

【注】本研究は平成 25～29 年度、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業費の助成を受けて行われた研究の一部である。